

# 朱子と詩——なぜ禁詩の誓いはすぐ破られたのか

国士舘大学 松野 敏之

## 一、朱子

朱熹 一一三〇〜一二〇〇 南宋の理学家。……客観的観念論の思想体系を樹立した。自然観の面では、「理」が宇宙の本体であり、「未だ天地あらざるの先、畢竟これまず理あり」、万物には万理があり、「天地万物の理を総ぶる、便ちこれ太極」とし、封建社会の秩序と倫理道徳も「理」から生ずる、しかし人性には「天理」と「人欲」の対立があり、そのため「天理を存し、人欲を滅ぼし」て「三綱五常」などの本性を回復しなければならぬ、とする。道徳修養の面では、「居敬窮理（内省と真理探究）」を強調し、「居敬窮理」を通じて「仁」を追求した。経・史・文学・楽律に精通し、著述は非常に多く、『四書集注』『周易本義』『詩集伝』『楚辞集注』および後人が編纂した『朱文公文集』『朱子語類』などがある。(孟慶遠 主編『中国歴史文化事典』新潮社、四五八頁)

## 二、禁詩の誓い

### (1) 張栻「南嶽唱酬序」(『南軒集』巻十五)

己卯(十一月十五日)の夕、中夜 凜然たるに方りて、残火を撥して相ひ対するに、吾が三人(張栻・朱熹・林用中)の是の数日間亦た詩に荒めるを念ず。大抵事に大小美悪無く、流れて返らず、皆な以て志を喪ふに足る。是に於て始めて要束(決まり事)を定めて、翼日当に止むべし。蓋し是れ後事 歌ふ可き者有りと雖ども、亦た復た詩に見さざるなり。嗟乎、是の編を覽る者、其れ亦た吾が三人の者を以て自ら傲むるか。

### (2) 題二関後自是不復作矣 二関の後に題す 是れ自り復た作らず 朱熹

久○惡○繁○哇○混○太○和○  
云○何○今○日○自○吟○哦○  
世○間○萬○事○皆○如○此○  
兩○葉○行○將○用○斧○柯○

久しく悪む 繁哇の太和を混ざるを  
いかなぞ今日 自ら吟哦する  
世間 万事 皆な此くの如し  
兩葉 行ゆく 將に斧柯を用ひんとす

(下平声・歌韻)

## 三、湖南・衡山の旅

乾道三年(一一六七)

八月 一日 林用中と共に福建を出発。  
九月 八日 長沙に到着。岳麓書院にて張栻と共に二ヶ月ほど講学する。  
十一月六日 張栻・林用中と共に南嶽衡山に行く。  
十一月二十三日 張栻と別れ、林用中・范念徳と共に帰路に就く。  
十二月二十日 帰郷。

※この旅(約四ヶ月)で朱熹は二百餘篇の詩詞を詠じた。特に南嶽衡山の旅では、甲戌(十一月十日)から庚辰(十一月十六日)までのおよそ七日の間に朱熹・張栻・林用中の三人で百四十九篇の詩を詠んだという(張栻「南嶽唱酬序」)。

四、作詩とは

(3) 朱熹「南嶽遊山後記」(『朱文公文集』卷七十七)

其の間(十一月十九日から二十二日に張栻と別れるまで)山川林野、風煙景物、向來見る所に視べ  
て、詩に非ざる者無し。而うして前日既に約有り。然れども亦た夫の別るる日の迫れるを念じ、  
而うして前日講ずる所蓋し既に其の端を開きて未だ竟らざる者有り。方に且く相ひ与に思繹討  
論して、以て其の説を畢ふれば、則ち其の詩に於て固より暇あらざる所の者有り。丙戌(十一月  
二十二日)の莫、熹衆に諗げて曰く、「詩の作や、本より善からざるもの有るに非ざるなり。而  
れども吾人の深く懲して痛く之を絶つ所以の者は、其の流れて患を生ずるを懼るのみ。初めよ  
り亦た豈に詩に咎有らんや。然り而れども今遠別の期近づきて朝夕に在り、言に非ざれば則ち  
以て喻へ難きの懷を写す無し。然らば則ち前日一時の矯枉過甚の約、今亦た以て罷む可きなり。」  
皆な応へて「諾」と曰ふ。

既にして敬夫(張栻) 詩を以て贈り、吾が三人も亦た各おの答賦して以て意を見す。熹は則ち  
又た進みて言ひて曰く、「前日の約已に過ぎたり。然れども其の戒懼警省の意は、則ち忘る可  
らざるなり。何となれば則ち、詩は本より志を言へば、則ち其の湮鬱(鬱屈した思い)を宣暢し、  
平中に優柔する(心を穏やかに宥める)に宜し。而れども其の流るるは乃ち幾んど志を喪ふに至る。  
群居に輔仁の益有れば、則ち其の義精理得、動もすれば倫慮に中るに宜し。而れども猶ほ或ひは  
流るるを免れず。況んや離群索居の後、事物の変に窮り無く、幾微の間、毫忽の際、其の以て耳  
目を嘗感し、心意を感移す可き者、又た將た何を以て之を禦がんや。故に前日の戒懼警省の意は、  
小過と曰ふと雖も、然れども亦た過に当る所なり。是に由りて之を擴充すれば、其れ過寡き  
に庶幾からん」と。敬夫曰く、「子の言や善し。其れ遂に之を書して、以て詔げて忘るる母かれ」  
と。

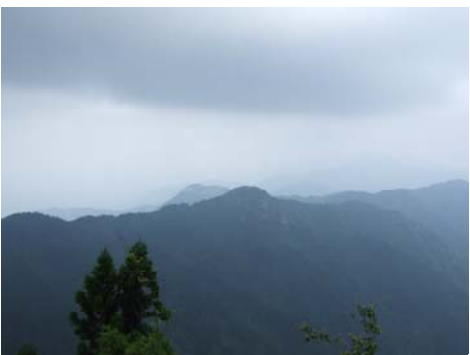
(4) 擇之所和生字韻語極警切次韻謝之兼呈伯崇 扱之(林用中) 和する所の「生」の字の韻

●●●●●●●●●●	語極めて警切韻を次ぎて之に謝し兼ねて伯崇(范念德)に呈す	朱熹
●●●●●●●●●●	不是譏訶語太輕	
●●●●●●●●●●	是れ語太だ輕きを譏訶するにあらず	
●●●●●●●●●●	題詩只要警流情	詩を題するには 只だ流情を警むるを要す
●●●●●●●●●●	煩君屬和增危惕	君が屬和を煩はして 危惕を増す
●●●●●●●●●●	虎尾春冰寄此生	虎尾 春冰 此の生を寄す

(下平聲・庚韻)

(5) 朱熹『詩集伝』序文(淳熙四年・一一七七)

或るひと予に問ふこと有りて曰く、「詩は何の爲にして作るや」と。予之に応へて曰く、「人生れて静なるは、天の性なり。物に感じて動くは、性の欲なり。夫れ既に欲有れば、則ち思無きこと能はず。既に思有れば、則ち言無きこと能はず。既に言有れば、則ち言の尽す能はずして咨嗟咏歎の餘に発する所の者、必ず自然の音響節族有りて已むこと能はず。此れ詩の作る所以なり。」



祝融峰(衡山主峰)の眺望

五、心（已発・未発）と性情

(6) 『中庸』第一章

喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂ふ。発して皆な節に中る、これを和と謂ふ。

〔朱熹略年譜〕

隆興元年（一一六三・三十四歳）

『論語要義』（佚書）

隆興二年（一一六四・三十五歳）

『延平答問』 ※李侗

（延平）は前年に逝去

乾道三年（一一六七・三十八歳）

長沙に赴き張栻を訪ねる

乾道四年（一一六八・三十九歳）

『二程遺書』

乾道五年（一一六九・四十歳）

「未発已発説」

淳熙四年（一一七七・四十八歳）

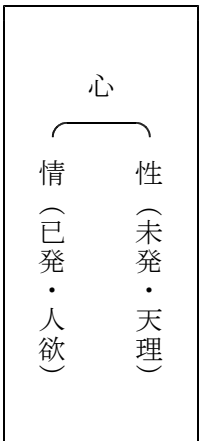
『論孟集注』『詩集伝』『周易本義』

旧説

定説（四十歳以降）



※ が工夫（修養）の対象



六、自警詩

(7) 朱熹「東歸乱稿序」(『朱文公文集』卷七十七)

然る後に崇安に至る。始めて尽く其の囊を舐き、乱稿を掇拾し、纒かに二百餘篇を得たり。取りて之を読めば、義理に当たり音節に中る能はずと雖も、然れども其の間に視ふれば、則ち交規自警の詞愈いよ多しと為す。斯も亦た吾人の朝夕見て忘れざらんと欲する所の者なり。……庶乎はくは後日之を觀て、以て惕然として自省して改むる所以を思ふこと有らん。

(8) 宿梅溪胡氏客館觀壁間題詩自警二絶 其二

十年湖海一身輕  
歸對黎渦却有情  
世路無如人欲險  
幾人到此誤平生

梅溪胡氏の客館に宿し壁間の題詩を觀て自ら警む二絶 其二 朱熹  
十年湖海 一身輕し  
歸りて黎渦に對して 却て情有り  
世路 人欲の險に如く無し  
幾人か此に到りて 平生を誤る

(下平声・庚韻)

※ 湘潭にて宿泊した先で胡銓（一一〇二—一一八〇）の詩を目にして詠じた自警詩である。「黎渦」は、胡銓の侍妓黎倩のえくぼ。胡銓の詩句「傍有梨頬生微渦」をふまえる。

(9) 次韻伯崇自警二首 其二 伯崇の自警に次韻す 二首 其の二 朱熹  
誦●君●佳●句●極●優●柔●  
未●得●明●彊●是●所●憂●  
若●悟●本●來●非●木●石●  
保●君●弘●毅●不●能●休●  
君が佳句を誦するに極めて優柔  
未だ明彊を得ず 是れ憂ふる所  
もし本来は木石に非ざるを悟らば  
保つ 君が弘毅 休むこと能はざらん  
(下平声・尤韻)

(10) 次韻擇之聽話 朱熹  
語●道●深●慙●話●一●場●  
感●君●親●切●為●宣●揚●  
更●將●充●擴●隨●鈎●索●  
意●味●從●今●積●漸●長●  
扱之の話を聴くに次韻す 朱熹  
道を語りて深く慙づ 話一場  
感ず 君が親切に 為に宣揚するを  
更に充擴を將て 鈎索に随ふ  
意味 今より積みて漸く長からん  
(下平声・陽韻)

(11) 再答擇之 朱熹  
兢●惕●如●君●不●自●輕●  
世●紛●何●處●得●關●情●  
也●應●妙●敬●無●窮●意●  
雪●未●消●時●草●已●生●  
再び扱之に答ふ 朱熹  
兢惕 君が自ら軽んぜざるが如くんば  
世紛 何れの処か 情に関はるを得ん  
也た応に 妙敬 窮まる無きの意なるべし  
雪 未だ消えざる時 草 已に生ず  
(下平声・庚韻)

七、人情 (荻生徂徠)

(12) 東都四時樂 其一 東都 四時の樂 其の一 荻生徂徠

東叡山頭花似氛  
東叡山下雪紛紛  
笙歌千隊齊聲唱  
那得暫時停白雲  
東叡山頭 花 氛に似たり  
東叡山下 雪 紛紛  
笙歌 千隊 声を斉しうして唱ふ  
那ぞ 暫時 白雲を停むるを得んや

(13) 東都四時樂 其三 東都 四時の樂 其の三 荻生徂徠

秋滿品川十二欄  
東方千騎簇銀鞍  
清歌一闋人如月  
笑指滄波洗玉盤  
秋は滿つ 品川 十二欄  
東方 千騎 銀鞍簇まる  
清歌 一闋 人月の如し  
笑つて指す 滄波 玉盤を洗ふを

〔参考文献〕

- ・『朱子絶句全訳注』第四冊 汲古書院 二〇〇八年七月
- ・『朱子絶句全訳注』第五冊 汲古書院 二〇一五年八月
- ・東景南『朱熹年譜長編』(上下) 華東師範大学出版社 二〇〇一年九月
- ・後藤淳一「朱子と詞—乾道三年の詞作を中心に」『中国詩文論叢』二七集 二〇〇八年十二月
- ・垣内景子『「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究』汲古書院 二〇〇五年八月
- ・土田健次郎『江戸の朱子学』筑摩書房 二〇一四年一月
- ・一海知義・池沢一郎『江戸漢詩選2 儒者』岩波書店 一九九六年五月